

[資料紹介]

中国人大学生が読んだ日本文学

—中国惠州学院との共同教育・研究提携の成果報告⑤—

泉 敬史・康 伝金

本学と中国惠州学院との提携交流は、7年目を迎えた本年度、世界的な新型コロナウイルスの蔓延という予想外の出来事によって大きな影響を受けた。3月に実施を予定していた現地での海外研修は、定員を越える参加希望者を集めながらも中止のやむなきに至り、毎年惠州から来学する教員1名・学生2名の客座研究員と交換留学生の派遣も見送られた。せっかくの貴重な交流機会が失われたことは残念の極みではあるが、毎年本紀要にページをいただいている成果報告については、ここに「その⑤」として例年通り掲載できることを関係各位と共に喜びたい。互いの学舎を訪問して交流活動する機会が失われている中でもこれができたのは、ひとえに惠州学院日本語学科の先生方、学生諸君の弛まぬ研鑽とご努力の賜物であり、心から感謝申し上げたい。なお、現時点（2021年1月）では2021年度の交流事業にも少なからず影響が残ること覚悟せざるを得ない状況であるが、まずはご一読いただき、本交流の全面復旧を願う気持ちを共有いただければ幸いである。

さて、今回も康伝金先生（惠州学院外国語学院副学院長）をはじめとする先生方にご指導・査読審査いただいた8編の論文を掲載する。まず申し述べるべきは、今まで4度の掲載を通して「中国人大学生が読んだ日本文学」としてきた表題では、もはや収まりきらない多様化を果たしていることであろう。村上春樹や東野圭吾といった毎年必ず選ばれてきた現代人氣作家作品だけでなく、明治から平成までを生きて近現代日本を作品に投影した井伏鱒二や、「むかし、男ありける」平安期の歌物語「伊勢物語」、元代雜劇「西廂記」の和訳本比較などが論考され、さらに文学を離れて、中

国における日本語教育へ物申す論考や、「コモンキャリア広告」・「ホトケ男子」・「仏系青年」といった日中にまたがる社会現象も論考対象とされている。筆者たちはいずれも大学院への進学を決めており（北海道大学に2名・神戸大学に1名、計3名が日本にもやってくる）、各論は彼ら中国の好学心篤い若者たちが、自国メディアを媒体としてではなく、日本語を学び、身につけた日本語力を生かして、自身を媒体にして直接知見した日本について、その奈辺に知的好奇心を抱いたのかを教えてくれる。

コロナによって停滞を余儀なくされた両校の交流事業は、今後オンライン形式による交流イベント等での挽回機会も検討されている。本稿を「資料提供」という形でお読みいただき、そういった機会の活用にもつなげていただければ幸いである。（泉）

『伊勢物語』における在原業平の「色好み」から見られる 反体制精神

惠州学院外国語学院日本語学科 2020 年度卒業生 王 琳

■指導教員 曾 源深、康 伝金

講評

『伊勢物語』は950年頃に成立した作者不詳の歌物語である。主人公とされる在原業平は、光源氏とともに平安時代を代表する「色好み」の人物として知られる。

古語である「色好み」は、負の言葉ではなく、むしろ恋愛の情趣を良くわきまえた洗練された恋ができる人に対する讃える表現である。『伊勢物語』における恋に生きる業平の姿は、政略結婚が主流である平安時代に、あたかも世俗と権力に背く反体制派のヒーローとして憧れを持って受容されていたのであろう。本論では、まず「色好み」の意味を簡単に説明し、文献研究法と帰納推

理法を利用し、『伊勢物語』の在原業平の「色好み」をめぐり、彼の持った貴族のみやび、すける物思ひ、博愛の精神という三つの特徴を分析する。最後は、前述をもとにして、「色好み」の業平の恋愛手段と恋愛相手から見られる反体制精神を解説した。なお、筆者は卒業後北海道大学観光学研究科への進学が決まっている。

はじめに

『伊勢物語』は平安時代初期に成立した歌物語である。主人公とされる在原業平は、光源氏とともに平安時代を代表する「色好み」の人物として知られる。「色好み」という響きや、平安時代に対する漠然とした印象から影響を受け、「色好み」には、多くの人は「色事の好きなこと」というイメージがある。しかし、実際の「色好み」は平安時代に、とくに平安朝時代の作品が持つ美的価値だと認められている。『伊勢物語』における恋に生きる業平の姿は、政略結婚が主流である平安時代に、あたかも世俗と権力に背く反体制派のヒーローとして憧れを持って受容されていたのであろう。拙論は『伊勢物語』における主人公の色好みを分析し、作品に反映された反体制を考察し、『伊勢物語』の研究をもっと全面的にするための役に立つ考えを提出したい。

1. 色好みについて

「いろごのみ」について、小学館の『日本国語大辞典』の補説では、漢語の「好色」との関連は必ずしもはっきりしない。「いろ」を配偶者、「このみ」を選択の意とし、「好色、多情な者という意味合いはなかったという説もある」と述べている。しかし、時代の発展に従い、美的意味が薄くなり、好色の意味が強くなった。それに、近世以後、「好色文学」の発展に伴い、「色好み」の貴族の雰囲気が見えなくなるに連れて、現代人が平安時代の文学作品を理解することが難しくなりつつあるのである。

2. 『伊勢物語』の在原業平と色好み

在原業平は『伊勢物語』の主人公として、平安文学において「色好み」を代表する人物である。前の分析に踏まえて、「色好み」の要素は和歌の才能、恋、情熱に離れてはいけない。拙論は、それに基づき、『伊勢物語』における業平の「色好み」という特徴の考察を中心にする。貴族のみやび、すける物思ひ、博愛の精神という三つの部分に分けて、「色好み」の理想像とされる人物の成立を明らかにしたい。

2.1 貴族のみやび

『伊勢物語』は、まず第一段を「昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける」と結ぶ。京で元服を迎えたばかりの貴公子がさっそうと知己の田舎人に己の晴姿を見せつけに行く。その嬌慢な心が、鄙にはまれな可憐な姉妹を垣間見「思ほえず」心地まどう。このような時は、まず和歌をおくらねばならないが、まさかこのようなところに出逢いがあるとは予想できず料紙の用意がない。ここでどうするかが「色好み」の由縁である。男は迷わず、身につけていた狩衣を破り、そこに歌をしたためた。男の見事さは衣を破った行為ではなくその歌にあった。「春日野の若むらさきのすりごろもしのぶの乱れかぎりしられず」つまり、「恋に落ちた自分の心の乱れが、この信夫摺りの衣装です。」と表現し、自分の心を伝えるにはこの衣で書く必要があったと詠んだ。このエピソードに『伊勢物語』の語り手は「昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける。」と、昔の人は、このように恋のために果敢に行動した、と評する。

阿部俊子の語訳による「みやび」の解釈は「優雅で才気のある行為」である。こういう行動が「みやび」、みやびな「色好み」をよく示している。平安貴族出身の業平の「色好み」は、貴族のみやびのもとに恋を追求して、恋を味わう行動である。

2.2 すける物思ひ

『伊勢物語』の第四十段では、「昔の若人は、さるすける物思ひをなむしける。今の翁、まさにしなむや」と述べている。

姿も心もそう悪くはないのだが、その家の召使であった女に、その家の若い、まだ自立していない「男」が思いをかけた。親は女の卑しい身分で、二人を引き離そうとして、ついに女を追いやってしまう。「男」は悲しみのあまり絶え入ってしまったが、それに驚いた親が、うろたえて神仏に願をかけたおかげで、まる一日を経て、翌日の戌の刻ころに、かろうじて甦った、という。こうした若い「男」の命がけの恋を語ったのち、『伊勢物語』は、命にかえてもという、その恋の心ざしを、「すける物思ひ」と呼んだのである。この「すける」には、たんに「好く」「好む」というだけではなく、激しく燃える恋に生きようとする若者への、真実の同情がこめられているのである。

『伊勢物語』における業平は、恋のためなら、命も惜しまない人である。業平の和歌、振る舞い、および彼の一生から見れば、「すける物思ひ」の精神、情熱に身を灼いた恋愛の精神は、この上なく自然である。

2.3 博愛の精神

博愛の精神とはすべての人を等しく愛することであり、それは、業平がいとしい人もそうでない人も、区別しない心を持っていた行動の中にある。通常、業平像は「好色」のイメージと、簡単に重ね合わされがちであるが、『伊勢物語』の「業平像」は、博愛の精神を持ち、誰に対しても親切でやさしい人物として描き出されていたといってよい。そうでなければ、『伊勢物語』の「業平像」は「色好み」の理想像だとは言えない。

3. 『伊勢物語』における在原業平の「色好み」から見られる反体制精神

第二章では、『伊勢物語』における在原業平の「色好み」を「貴族のみやび」、「すける物思ひ」、「博愛の精神」という三つの特徴にまとめ、それぞれに分析した。その中、「貴族のみやび」は、貴族としての在原業平が愛情を追求するための手段に現れる。それに、「すける物思ひ」と「博愛の精神」は業平が異なる恋愛対象と付き合う中に、現れた一貫した精神を通じ現れたものである。恋愛対象を問わず、一貫して相手への思いやりを込め、相手と付き合っているというのは、在原業平の「色好み」の独特な所となった。これを踏まえ、第三章では、恋愛手段と恋愛対象という二つの視点から、在原業平の「色好み」に現れた反体制精神を分析する。

3.1 恋愛の手段から見た反体制精神

在原業平の恋愛手段には、少年としての熱血と真誠のほかには、貴族としての優雅と才知も含まれている。従い、平安時代に登場したほかの文学イメージと比べ、在原業平は独特な人格魅力を持っていることが分かる。これは彼の反体制性の表れでもある。

平安時代の女性は人前に顔を出すことは多くない。恋をする際は、人からの紹介ではなく、通りかかった家をチラッと見たときに美しい女性を発見して惹かれてしまう、ということもある。このように、好きな女性を物陰からコソコソと見ることが「垣間見る」と言われていたのである。「垣間見る」という恋愛の手段は、男主人公が女性に接近しようとする契機を提供し、色好み物語の本筋を構成する。

『大和物語』の第一五四段「ふゆつけ鳥」も、「垣間見る」の話である。大和の国に住んでいた娘で、たいそうきれいな人に、都から来た男がちらと見て、あまり美しいので、盗み出して抱きかかえて、馬に乗せて逃げた。女はひどく恐ろしいと思った。日が暮れると、竜田山のあたりに宿を借り、泥よけを敷物の代わりに敷いて、無理やり抱いたので、女は恐怖に

襲われたのだった。結局、女は歌を詠んで、自殺してしまった。第一五五段『山の井の水』も男が垣間見たときに美しい女を発見し、女を奪い去って、すぐさま死んでしまうような話である。平安時代の貴族が異性に言い寄る時、詠歌が欠かせない行為であるが、『大和物語』の男が女が好きになったら、女の意見を求めずに奪って逃げる。詠歌で思いを言い表す行為はほとんど見られなく、非現実的思考や、不道德で衝動的な行動であろうか。

上記の男と比べると、『伊勢物語』の業平の恋愛手段は全く違う。この自由奔放な若者にとって、狩衣の裾を切って、それに歌を書きつけて贈ったという行為は伝統に手向かう表現である。しかし、いかなる自分の気持ちを伝えたくても、貴族の美德を守って優雅で才気のある行為を取った。反体制精神を持っても暴力に訴えず、情熱をこめても貴族のみやびを曲げない。これはまさに『伊勢物語』である。

3.2 恋愛の相手から見た反体制精神

「すける物思ひ」と「博愛の精神」は業平が異なる恋愛対象と付き合う中に、現れた一貫した精神を通じ現れたものである。道徳・論理に禁止される対象であれ、年を取った人であれ、彼の恋愛対象になる。恋愛対象を問わず、一貫して相手への思いやりを込め、相手と付き合っているというのは、在原業平の「色好み」の独特な所となった。従い、恋愛対象の選択においても、在原業平の反体制的な精神が見られる。

六段の「芥の川」に、ヒロインと擬される清和天皇后高子も禁じられた恋の相手である。藤壺高子は、良房の兄、長良の娘で基経、国経と同母の兄妹であり、当時、一八歳であった。業平と引き裂かれた原因は、清和天皇への入内のためだったが、清和天皇は当時九歳であった。高子が入内するのは、良房、基経たちの政治的人身御供状態であった。この間におきたとされるのが業平とのロマンスである。「芥の川」の末文で「鬼」の正体を「御兄、堀川の大臣、太郎国経の大納言、まだ下らふにて、内裏へ参りたまふに、いみじう泣く人あるを聞きつけて、とどめてとりかへしたまう

てけり。それをかく鬼とはいふなり。」と後人の加筆で明かしている思いに目を向けるべきだろう。藤原北家の繁栄の基礎を作った良房、基経の強引な権力の握り方を百年後の一〇世紀半ばの女房たちは生理的に嫌悪し、物語の中で「鬼」という表現を用いたのではないだろうか。愛のために世俗と権力に背いて「鬼」と立ち向かい、敗れてしまった反体制派の業平は、藤原北家のみが繁栄する摂関政治中、悲劇の主人公として、『伊勢物語』の享受者に支持されている。

おわりに

日本の文学史上において、『伊勢物語』は長い時代にわたって広く愛され続けてきた作品である。有名人在原業平の風流韻事であれ、あるいは最初の「歌物語」であれ、説得力が足りないのである。現存する『伊勢物語』はある時期に一人の作者の手によって一度に作られたわけではなく、およそ一世紀くらいかけて何段階かの増補・成長の過程を経て現在の形に整えられたものである。業平の一生は「色好み」で貫かれている。愛のために権力者と立ち向かい、世俗と権力に背くような精神を伝える。この物語の成長の際、摂関政治による閉塞感を感じていた人々にとって、恋に生きる在原業平の姿は、体制を打ち破っていくような英雄を感じさせたのである。それから、業平を思わせる主人公の物語が加筆され、成長していったのだろう。専門知識の不足で、触れない細部も多くあると思っている。今後は、『伊勢物語』に関する研究も続けたく、この方面の能力をもっとあげるよう精進していきたいと考えている。

参考文献

- 1) 堀内秀晃『竹取物語；伊勢物語』岩波書店、1997年。
- 2) 佐伯梅友『古今和歌集』岩波書店、1981年。
- 3) 林 文月「伊勢物語」訳林出版社、2011年。

- 4) 中村真一郎『色好みの構造——王朝文化の深層』岩波新書、1985 年。
- 5) 大野順一「色好みの系譜：日本文芸思想史」創文社、2002 年。
- 6) 小松英雄『伊勢物語の表現を掘り起こす』笠間書院、2010 年。
- 7) 渡辺泰宏『色好み新世界』武蔵野書院、2016 年。
- 8) 大野順一「伊勢物語と色好み」『明治大学文芸研究会』第2号、2000 年、1-54 頁。
- 9) 田中幹子「平安時代の色好みは反体制派——『伊勢物語』禁断の恋」札幌大学公開講座運営委員会、2013 年、7-44 頁。
- 10) 張龍妹「中日“好色”文学比較」『日語学習与研究』第2号、2003 年、63-67 頁。
- 11) 姚继中「『伊勢物語』之瀟洒——「みやび」」『日語知識』第6号、2010 年、35-36 頁。
- 12) 修翠華「論『伊勢物語』的内在反抗精神——以主要愛情故事為中心」『日本学研究』第1号、2004 年、225-238 頁。
- 13) 馬曉琳「『伊勢物語』における「色好み」について」西安外国語大学、2015 年。

『西廂記』日本語訳本に対する比較研究

——岡島献太郎、宮原民平、田中謙二の訳本を例として——

惠州学院外国語学院日本語学科 2020 年度卒業生 楊 適意

■指導教員 付 自文、康 伝金

講評

17 世紀中頃より前に、『西廂記』が日本に伝わってきた。その和訳本の考証については、統計によると、16 種類の訳本が相次いで登場した。本稿が研究している岡島献太郎、宮原民平、田中謙二の訳本は、それぞれ 1894 年、1914 年、1970 年に出版され、時代によって中国の戯曲に対する訳者の理解と考えを代表している。三人の学者が中国の戯曲を翻訳する異なる方式と特徴を探究することを通じて、中国文学作品に対する彼らの受容を探究し、時代に従って転換と変化を見せつつある日本の漢学の容貌を垣間見ることができた。なお、筆者は卒業後四川大学日本語研究科への進学が決まっている。

はじめに

『西廂記』は、元の王実甫による雑劇で、正式な題は『崔鶯鶯待月西廂記』、元曲の最高傑作といわれている。この作品は唐の元稹の小説『会真記』、金代の語り物『西廂記諸宮調』に基づき、山西省の名寺普救寺を舞台に、封建礼教と自由恋愛の抗争を主題とし、遊学の書生の張生と宰相の遺児である崔鶯鶯の美しい恋愛を描く。

元雑劇の名作として知られ、『西廂記』は日本では、江戸、明治、大正などの時代を経て、次第に日本の人々に注目され、多くの和訳本が出てきた。一番早いのは19世紀末に岡島献太郎が訳したものである。

本稿は明治、大正、昭和の三つの時期の中国戯曲研究の動向を最も代表できる岡島献太郎、宮原民平、田中謙二の訳本に研究の主眼を置きたいものである。それぞれの内容、翻訳方式と特徴を研究することを通じて、日本の伝統的な漢学が新しい時代と学術背景のもとで発生した転換と進化を考察することができ、元曲翻訳史料の研究を豊富にさせることができるだろうと思う。

1. 岡島献太郎の訳本

岡島献太郎（岡島泳舟）が活躍していた時代は古く、それほど多くの情報が見つからない。限られた資料によると、彼は森槐南らとともに、中国の戯曲に最初に注目した人とされ、伝統的な漢詩人であり、漢学者から脱皮した学者である。

1.1 訳本の背景

幕末、日本国内で倒幕運動が激しくなった。武士政権の終焉に伴い、日本は天皇政権を確立し、年号を「明治」に改めた。この時期には一連の改革措置が發布され、次第に封建社会から脱却し近代化の道を歩むようになった。また、西洋の先進思想の伝来に従い、社会情勢が一変し、漢学は

洋学に圧倒され衰微の道を辿り、伝統的な漢学、特に儒学が提唱した尊卑観念は巨大な打撃を受け、漢学者らは革新の道を求め、中国の戯曲に注目を集めていた。

1.2 訳本の分析

中国の戯曲は文言と口語が共存する文体である。戯曲の翻訳といえば、登場人物のセリフが多いが、その翻訳は難しくなくなる。そのため、戯曲作品中の文言語彙や文の翻訳には深い考察が必要となる。

戯曲が日本に入ってから学者らは主に「通俗化」と「訓読み」の2種類の翻訳方法を採用した。岡島献太郎の訳本では「訓読み」が採用されている。訓読みとは、漢文の形をそのまま保ち、「訓点」を加え、漢詩の語順を日本語の語順に調整し、日本語の発音で読むことである。この直訳法は、伝統的な漢学の存在の基礎であり、日本人が中国の文言典籍を読む方法として代々受け継がれてきた。

訓読みは文言文学を翻訳する際には大きな問題はないが、戯曲を訳すには、不足が存在している。「雪浪拍長空、天際秋云卷。竹索纜浮橋、水上蒼龍偃」（金聖嘆、1986：49）が、「雪浪長空ヲ拍ッテ天際秋雲捲キ竹索浮橋ヲ纜テ水上蒼龍偃シ」（岡島献太郎、1894：11）と訳されているように、岡島献太郎の訳本は原文の趣をよく伝えているが、意識が必要なセリフが分かりにくくなっている。

訓読みは原文に限りなく近い翻訳方法とされていたが、その弊害は千年以上にわたって日に日に暴露されている。例えば、漢字は日本語の推移の中で徐々に意味が変化しており、多くの同形異義語の存在が漢文の意味理解に影響を与え、訓読みが形式的な翻訳となっている。このような問題は中国戯曲の翻訳に普遍的に存在している。

2. 宮原民平の訳本

宮原民平は、佐賀県出身で、1902年台湾協会大学（拓殖大学の前身）

に入学した。宮原氏はまた大正年間に中国の戯曲を多く翻訳している学者でもあり、宮原氏が訳した『西廂記』などが『国訳漢文大成』に収録されており、著書に『中国小説戯曲史概説』がある。

2.1 訳本の背景

漢学は中国の古典籍をもとにした学問を意味し、日本では古代より連綿と継続する伝統のある学問分野である。(朱琳, 2017: 2) 江戸時代の日本において、漢学は主に儒学や詩詞、いわゆる伝統的な漢学を指している。

明治時代に、日本は国内外の環境の影響を受け、高等学校が急速に設立された。資本主義の近代化の過程で成長した日本の青年漢学者たちは、西洋の資産階級の文学観や文学研究の方法に影響され、新しい見方で伝統的な漢学を見直すようになった。

2.2 訳本の分析

宮原民平が北京に留学した際、雑誌『燕塵』に金聖嘆本の『西廂記』の部分訳が掲載された。この訳文は日本の新体詩風を模して、七五調などの調式を採用している。

岡島献太郎の選択とは異なり、宮原民平は陳眉公評本を『西廂歌劇』の底本としている。『西廂歌劇』は読者の受容度を視野に入れて、日本の七五調で翻訳された。『西廂記』の各バージョンの違いはジャンル、校注などであるが、原書の曲の詞は変化しないため、以下では金聖嘆評本『西廂記』と訳本『西廂歌劇』の一部を選んで比較する。

第一幕「佛殿奇逢」に崔夫人が歌う「盼不到博陵舊塚、血淚灑杜鵑紅」(金聖嘆, 1986: 47) は、比喩と洗練された文字で崔老夫人が、夫の霊柩を連れて、ほととぎすの声を聞きながら夫を悼んでいたが、故郷の博陵へ向かう途中で悲愴な気持ちと無力な苦衷を描いた。その訳文「道はるかなる博陵の、舊塚いつかゆきつかむ、山ほととぎす血を濺ぐ、つつじの花の紅としも、涙ぞ落つるはらはらと」(宮原民平, 1914: 25) は巧みすぎて

提起しなければならない。訳文は依然として原文の悲しい心境を整然と七五調で再現しており、「杜鵑」は訳文から「ほととぎす」と「つつじ」の二語を派生させている。前者は子規、後者はツツジである。「紅」はツツジの赤だけでなく、子規が長く鳴いて血を流した赤でもある（春夏の季節に、ほととぎすは夜通し鳴き続け、まさにツツジの花が満開になる頃で、人々はツツジのように真っ赤な花を見て、この色をほととぎすの鳴く血と言う）。

また、『西廂記』の第十五幕「長亭送別」は戯曲の衝突の焦点であったが、その中で「碧雲天、黃花地、西風緊、北雁南飛。曉來誰染霜林醉？總是離人淚」（金聖嘆，1986：256）という文は千古に伝わる名句であり、内容的に景色で情を書き、形式的に韻を踏んでいる。このシーンは張生が上京し、鶯鶯が見送り、別れを前にする鶯鶯の辛い気持ちを描いて、二人の真摯な愛情を表現している。訳文の「碧雲の天黃花の地、野分すさびて雁わたる。曉かけて見わたせば、山のもみぢば誰が染めし、離人の涙なかなか、しぐれとこそは降りにけめ」（宮原民平，1914：304）は、原文の意味に忠実な上で、七五調で原文の別れの情景を再現し、その韻律美を体現している。

3. 田中謙二の訳本

田中謙二は、滋賀県出身で、1934年に京都大学文学部に入学し、著名な漢学者である鈴木虎雄が師となった。田中氏は、日本では青木正児に続き、中国古典文学に最も造詣の深い人でもある。その研究方向は中国の古典文学に重点を置いていたが、『西廂記』に対する愛情は独特である。彼は長年、『西廂記』の研究に専念し、『西廂記諸宮調』と『西廂記』の関係および『西廂記』の物語の変遷を研究した論文を執筆してきた。

3.1 訳本の背景

明治以来、近代文化思潮の衝撃により、中国文化に対する研究様式が一

変し、理性主義と実証主義の理念を学術ガイドにするようになった。これは従来の漢学研究と質的な区別があり、対外文化の学術的研究となった。したがって、昔の「漢学」に代わって「支那学」という新しい名称が生まれた。

1945 年、日本が敗戦したことにより、「支那」という呼称が避けられたことから、中国に関する学問は「中国学」と呼ばれるようになっていく。「中国学」は現実的な中国に向け、研究方法も多様である。その方法は実地考察、中国学者との連絡と交流を保つことが含まれ、これは学者に中国人と同様の感じ方、考え方で中国を理解させ、身近な感性の認識を提供している。

3.2 訳本の分析

日本に伝来した『西廂記』のバージョンといえば、樊可人（2019：2）は、次のように書いている。

寛文年間に『西廂記』が伝来してから、その注釈本はしばしば唐話の辞書に例証として引かれ、方言や俗語の学習において、高い価値を示した。最も多く伝来していたのは金聖歎の『第六才子書西廂記』であり、ほかに王伯良、凌濛初などが校注した数種の版本も伝わってきたことが、諸資料から分かる。

1970 年、平凡社が『中国古典文学大系』の『戯曲集』を出版する際、田中謙二を招いて『西廂記』を再翻訳した。彼は、原作の趣をより反映していると思っていた凌濛初版本を選び、『元曲西廂記』を出版した。

韻文とは、大きく分けて「音数律」と「押韻」の2種類がある。『元曲西廂記』は韻文体を採用しており、本稿で触れた他の和訳本よりもリズム感が強い。訳本の第一幕では、崔鶯鶯が歌った「すずろの愁い、くさぐさに湧き。言の葉もなく、春風うらむ」（田中謙二，1970：4）という一文は、「押韻」が使われ、「愁い」と「湧き」の二つの語は、「い」という

響きを「脚韻」として使われている。「なく」と「うらむ」も同様の場合である。第五幕には、鶯鶯は紅娘に以下の歌った曲も訳本のあちこちにある音韻美を体現している。次は下線で、曲の韻であり、「そり」、「なし」、「傷めるに」などは「い」という響きを持ち、「合う」や「めく」といった語も「脚韻」を使い、「う」という韻を踏んだ。言葉が調和している。

「われ瘦せほそり、気力なし、すでにこころ傷めるに、うらぶる春にめぐり合う。羅の衣はだぶつきて、なお幾たびのたそがれに耐えん。みす垂れこめし閨房のうち、風にゆらめく、香のけむり、門をとどせる院ふかく、雨に打たるる梨の花。おばしめに寄り、ことばなく、そらゆく雲を見つめつつ。」(田中謙二、1970: 26)

韻を踏むことを通して、言葉が調和を取れ、口の調子を良くし、記憶を伝えやすくすることである。そのため、韻文体を用いたこの訳本はハーモニーのとれたことばを生みだし、言語が詩のように美しく、読んでいる際に他の訳本にはない音韻美を持っている。

また、田中謙二の訳本には、底本の曲名を取り除いたため、注釈が大幅に減少した。「無語怨東風」の一文には、季節に応じて「東風」を「春風」と訳している。このことから、訳者が読者を優先しており、字句の正確さよりも訳文の滑らかさ、全体的な意味の正確性に注目していることが分かる。

おわりに

日本と中国の言語・文化上の特殊な関係により、日本の学者は中国の古典戯曲に対する興味や研究が他の国をはるかに上回っているため、日本では16種類の訳本が相次いで登場している。本稿で研究した3つの訳本は、訳者の存在した時代から、底本の選択、翻訳手法まで異なり、中国語の原文への忠実な直訳から、舞台演出の効果を重視した表現、読者の受容度に

基づいて訳本の分かりやすさを追求するまでの3つの段階を経て、つまり中国の翻訳家嚴復が提唱した「信・雅・達」という翻訳理論である。その中で様々な微妙な変化は、日本語自身の発展だけでなく、異なる時代の日本人学者の中国古典作品に対する理解を反映している。これらの考察を通じて、翻訳技巧の変化に隠された多重要素の認知を拡張することに役立ち、日本の伝統的な学術転換と発展に対する認識を深化させることができる。これは翻訳仕事に従事する中国の訳者たちにも一定の啓発と参考を提供する。

参考文献

- 1) 岡島献太郎『西廂記』岡島長英、1894年。
- 2) 宮原民平、金井保三『西廂歌劇』文求堂、1914年。
- 3) 田中謙二『中国古典文学大系 52 戯曲集上』平凡社、1970年。
- 4) 金圣叹『金圣叹批本西廂記』上海古籍出版社、1986年。
- 5) 朱琳「近代日本における知識人の中国認識」東北大学、2017年、1-32頁。
- 6) 樊可人「近世日本における『西廂記』受容に関する研究」広島大学、2019年、1-4頁。
- 7) 全婉澄「日本明治大正時期(1868-1926)的中国戏曲の研究」中山大学、2009年、1-189頁。

井伏鱒二『黒い雨』における反戦意識について

惠州学院外国語学院日本語学科2020年度卒業生 廖 麗珊

■指導教員 具 香、康 伝金

講評

『黒い雨』は広島原爆の悲惨な光景を描いた長編小説である。井伏鱒

二は小説の中で、戦争が広島に大きな破壊を、人々に大きな被害を与えたことを強く訴えている。本稿はテキスト分析法を利用して、『黒い雨』の閑間重松家族の悲劇、戦争への反対態度、美しい生活への憧れの三つの方面について分析し、その反戦意識を検討した。本研究は戦争が人々にもたらした不幸と災難を反省し、再び戦争が勃発することを防ぐために警鐘を鳴らすと考える。なお、筆者は卒業後ハルビン師範大学日本語研究科への進学が決まっている。

はじめに

米国は1945年、広島と長崎に原爆を投下し、両都市の住民20万人以上の死傷者を出した。戦後、多くの日本人作家が筆を執り、目にした原爆の悲惨な光景を描き、平和を求め、戦争と核兵器に反対する強い願いを表現した。井伏鱒二の『黒い雨』（1965-1966）はその一つである。江藤淳は『黒い雨』を「作者が見事にこの平常心をつらぬき通し」、「動かしがたい説得力を持ち」（『文芸時（上）』『朝日新聞』昭41）と大変高い評価を与えた。

井伏鱒二の『黒い雨』に関する研究は国内外の学者は様々な方面と角度から研究があった。例えば、野中寛子（2010）は『別府大学国語国文学』に「井伏鱒二「黒い雨」—歴史小説における史実と虚構」を研究した。孫育紅（2011）は華中師範大学の日本語文学の修士論文に井伏鱒二の戦争文学論—『花の街』『遥拝隊長』『黒い雨』における井伏鱒二の戦争観を中心に、井伏鱒二の戦争観を論じた。上記の研究から見ると、研究者たちは井伏鱒二のいくつかの作品を、様々な角度で研究したが、井伏鱒二の『黒い雨』における反戦意識を分析するについての詳しい研究はそんなに多くない。だから、本稿はテキスト分析法を利用して、『黒い雨』における反戦意識を究明したいと思う。

1. 『黒い雨』の創作背景

この部分は『黒い雨』の創作背景を詳しく分析することで、当時の社会環境、作者の従軍体験の影響の二つの方面から、より良く『黒い雨』における作者の反戦意識を把握する。

1.1 当時の社会環境

1945年8月、米国は広島と長崎に原子爆弾を投下し、両都市の住民20万人以上の命を奪い、数十万人に放射能の後遺症を残した。これは日本軍国主義の降伏を加速したが、同時に広島の人々に深刻な災難をもたらした。戦後、戦中に日本軍の戦場の様子を直接に描写したものと戦後の生活を題材に、戦争が日本の一般民衆に与えた心の傷を描いた反戦文学が登場した。『黒い雨』はその一つである。

1.2 作者の従軍体験

二戦中、日本の有名な「筆部隊」が出る。つまり軍部に前線に派遣されて戦地報告や小説を作る作家という意味である。1942年に井伏鱒二はマレー半島戦線に徴用され、シンガポールで一年間の徴用生活を開始した。この期間中、井伏は戦争がもたらした重大な災難とファシズム軍人の横暴をよく目の当たりにした。戦争が終わってから、井伏鱒二はさまざまな形で戦争を反省することができる。戦争の体験は彼の社会的視野を広げ、彼の作品に新しい面を与えた。そして、広島は自分の出身地であり、その惨状を目の当たりにして、胸の痛みがいっぱいになった。それで、戦後、井伏は『遙拝隊長』や『黒い雨』などの作品を通じて、第二次世界大戦の批判を借りて反戦意識を表す。

2. 『黒い雨』に見られる反戦意識

この部分は『黒い雨』の内容を分析して、閑間重松家族の悲劇、戦争への反対態度、美しい生活への憧れの三つの方面から『黒い雨』に見られる

反戦意識を分析したいと思う。

2.1 閑間重松家族の悲劇

原爆を体験して生き延びた人はやけどや下痢、白血病の発症など、原爆症に苦しめられることとなった。被爆者閑間重松は最初に原子病と診断された。当時、治療法がないので、原爆症に染まっている人は重い仕事が出来なく、休養することも必要である。ある日、閑間重松と友達が池で釣り時、同村池本屋の小母はんは「お二人とも、釣りですかいな。この忙しいのに、結構な御身分ですなあ」（井伏鱒二，1980：23）と皮肉った。あの時、家族の主な労働力として、特に戦後の食生活などは非常に貧しく、生きるために労働しなければならない。他の人は重松のような原爆症の患者は労働しなくて非常に目障りだと考えるかもしれない。実は、原爆の時、人々は原爆患者に同情したが、時間が経つにつれて、戦争の残酷さを忘れてしまった。それだけではなく、原爆患者が差別されることもある。戦後、ある人は矢須子が被爆者であるという噂がたち、縁談時に、この噂を聞いて、速くこの縁談をやめることになる。矢須子は体の苦痛に耐え、幸せになる権利を失った。井伏鱒二は、重松家族の不幸な境遇を描写することで、非情な戦争が重松と矢須子のような被害者に体の苦痛だけでなく、精神的なストレスをももたらしたことを訴えていると思う。

2.2 戦争への反対態度

『黒い雨』は「被爆日記」を中心に、悲惨な被害状況や生活の様子が目に浮かぶように詳しく書かれた。『黒い雨』の中で被爆時をこのように書いている。

頭から流れる血が、顔から肩へ、背中へ、胸から腹へ伝わって、どす黒い血痕をつけている者は数知れぬ。（中略）両手をだらりと垂らし、人波に押されるまま、よろめきながら歩いている者。（井伏鱒二，1980：58-59）

自分の身近な人を殺傷し、故郷の自然を破壊し、日本の国民を死傷させたといったような悲惨な事件を描くことで、読者はその当時の有り様にリアリティが感じられる。国民は罪が無いのに、戦争で、不安定な生活を余儀なくされた。天は裂け、地は燃え、人は死んだ場面で、閑間重松は「戦争はいやだ。勝負はどちらでもいい。早く済みさえすればいい。いわゆる正義の戦争よりも不正義の平和の方がいい」（井伏鱒二，1980：170）といった発言が重ねられて来る。重松にとって、正義であろうと、不正義であろうと、戦争は早く終わればいい。また、死体を焼く兵隊が相棒に「わしらは、国家のない国に生まれたかったのう」（井伏鱒二，1980：172）と言った。これらの言葉は戦争被害者たちが戦争への素朴な考え方と根深い平和を希望している願いである。

2.3 美しい生活への憧れ

小説の中で白い虹が描かれる。重松の勤務する工場長は、二・二六事件の前日に白い虹を見て、重松は玉音放送の前日に白い虹を見た。一般的に虹は鮮やかで、白い虹はあまり見ない。従って、白い虹は悪い兆候の意味であると思われる。小説の結末で、矢須子の病気がひどくなるにつれて、重松は向うの山に、白い虹ではなく、五彩の虹が出たら矢須子の病気が治ると祈る。実は原爆症は治りようがないが、重松は奇跡が出て矢須子の病気が良くなるということを期待している。五彩の虹が出るのは、重松は矢須子の病気が治るようと祈るだけでなく、矢須子のような被害者が戦争でもたらされる災難から逃げ出してほしいという意味もあろう。

おわりに

本稿は『黒い雨』を中心に、閑間重松家族の悲劇、戦争への反対態度、美しい生活への憧れの三方面から『黒い雨』における反戦意識を検討した。『黒い雨』は原爆下の悲惨な世界を写実的に描き、原爆に対する強い

抗議をこめ、さらに戦争への抗議をも表白した貴重な作品と言えよう。戦争は侵略された国の人民に災難をもたらすだけではなく、日本の民衆に取り返しのつかない傷を与える。戦争はもう過ぎ去ったが、戦争が人々にもたらした不幸と災難を反省し、同じ過ちを繰り返してはいけないと思う。

本稿は主に井伏鱒二の『黒い雨』に見られる反戦意識をめぐって研究した。それで、主に作者の視点に沿って広島原爆状況を理解した。もしかしたら、この戦争の帝国主義的な性質を必要とする批判を加え、深層的な議論をすれば、より深い思想芸術力を持つかもしれない。

参考文献

- 1) 中村光夫「井伏鱒二論」『文學界』第11号、1957年、45頁。
- 2) 井伏鱒二『黒い雨』新潮社株式会社、1966年。
- 3) 井伏鱒二「花の城・軍歌「戦友」」講談社文芸文庫、1996年。
- 4) 小沼丹『井伏鱒二 群像日本乃作家』小学館、1990年。
- 5) 井伏鱒二『井伏鱒二集 日本文学全集41』集英社、1976年。
- 6) 野中寛子「井伏鱒二「黒い雨」——歴史小説における史実と虚構」『別府大学国語国文学会』第12号、2010年、19-31頁。
- 7) 孫育紅「井伏鱒二の戦争文学論」華中師範大学、2011年。
- 8) 胡志華「井伏鱒二の「黒雨」赏析」『電影文学』第10号、2010年。
- 9) 梁济邦「井伏鱒二の文学之路及其「黒雨」」『西安外国語学院学報』第4号、1999年。
- 10) 藍泰凱「井伏鱒二和戦後“戦争文学”」『貴陽師範高等専科学校学報(社会科学版)』第1号2004年。
- 11) 荣桂艷、王旦旦、趙磊「日本戦後派作家井伏鱒二文学魅力研究——以小説《黒雨》為中心」『内蒙古民族大学学報(社会科学版)』第38号、2012年、79-82頁。2004年。

『羊をめぐる冒険』に見られる喪失感

惠州学院外国語学院日本語学科 2020 年度卒業生 劉 惠霞

■指導教員 曾 源深、康 伝金

講評

『羊をめぐる冒険』は村上春樹の長編小説で、村上青春三部作の最終章である。小説は寓話性と神話の色彩に富んで、主人公は星の模様のある羊を探すために北海道への冒険の旅を始める。この冒険で、主人公は各種各様のものを失ってしまう。でも、この「喪失」の旅が終わると、主人公も新たな人生を始めることになる。拙論は、まず喪失感の意味を簡単に説明し、文献研究法と帰納推理法を利用して、作品中の「羊」の喪失、十二滝町の歴史、鼠の自殺や「僕」による幕引きを分析することで、『羊をめぐる冒険』に反映された喪失感を解説した。この上、心理学の理論と関連して、小説に隠されている喪失感の精神性を究明した。なお、筆者は卒業後北海道大学文学研究科への進学が決まっている。

はじめに

『羊をめぐる冒険』は1982年に出版された、村上春樹の初期三部作の第3作で、主人公の「僕」が星の模様のある羊を探すために北海道を旅する物語である。この物語は、前二章で示された喪失が、そのまま未来に向かって先見的に予定されているにもかかわらず、その喪失を主体的に受け止めるために展開されてきた。この数えきれないほどの喪失と多くの謎を残した物語は、現実と非現実の狭間を彷徨いながら、世界は誰かの「喪失」で出来て、前に進むためには、誰にでも訪れる喪失を受け入れなければならないということを暗に示している。

村上文学と言えば、『羊をめぐる冒険』も含まれる多くの作品に「喪失

感」というテーマが出てくる。この『羊をめぐる冒険』も「喪失感」が伝えられていると思われる。先行研究について、国内外の学者はもう各方面と各角度から一定の研究があった。いくつか代表的な論文を挙げれば、小島基洋（2015）は『午前8時25分、妻のスリッパ、最後に残された五十メートルの砂浜：村上春樹「羊をめぐる冒険」における〈再・喪失〉の詩学』で、『羊をめぐる冒険』における「喪失」を細かく解説した。遠藤俊介（2002）は『終わりを知らぬ物語—村上春樹の小説世界を題材にしての包括的喪失論—』で、村上春樹の作品に通奏低音として見られる喪失感と死生観から「包括的喪失論」について論じた。黒古一夫（2007）は『村上春樹「喪失」の物語から「転換」の物語へ』で、『羊をめぐる冒険』も含めた多くの村上春樹の作品について分析し、『羊をめぐる冒険』における喪失感の特殊性を検証した。

「喪失」あるいは「喪失感」をめぐる先行研究が数多く見られるが、喪失感の精神性にはあまり言及していなかった。拙論は『羊をめぐる冒険』における喪失感を分析することによって、『羊をめぐる冒険』の研究をもっと全面的になるための役に立つ考えを提出したい。この上、心理学の理論と精神的な角度からこの作品に反映された喪失感の本質を究明したいと思う。

1. 喪失感について

百人百様の夢があるのであれば、百人百様の喪失感が存在しうるし、それは人間として当たり前の感情である。然し、そもそも、喪失感が何故不幸の感情と捉えられるのであろうか。喪失感がないと、幸せの世代とでも呼ぶべきであろうか。あるいは過去と現在の喪失による喪失感は、未来へと進む踏み台になれるのであろうか。現代社会の人間は物質生活が豊かになるにつれて精神生活は貧弱になる。つまり、喪失感に直面する時、人間も次第に無力や無頓着になってしまう。したがって、喪失感の本質を把握しなければ、人間の無力や無頓着に対する不安は消しがたい。要するに、

喪失感というものを新たな角度から探究するのは、現実生活から離脱した無意味なことではない。

一般論の喪失感とは、自己の価値観における何かを失った時に抱える空虚な気持ちで、「あるはずのものが無い」という感覚を指す。心理学では、「何かを喪失した時、何度もその喪失感に触れることで、徐々に喪失を知的に、認知的に受け入れるようになるのである」と羽島健司や石村郁夫は『筆記と語りに関するポジティブ心理学的研究の概観』で言ったように、『羊をめぐる冒険』にも、それなりの精神性があると思う。ゆえに、消滅としての死や喪失を、見事に豊かな生に転換できる。これは喪失の否認でも、抑圧でもない、喪失にまつわる喪失感から逃げず、受け取ることを勧めているのである。

2. 『羊をめぐる冒険』に現れた喪失感についての分析

謎の羊をめぐる冒険は、何かを得るためではなく、何かを失うための冒険である。村上春樹の『羊をめぐる冒険』中、「喪失感」は重要な主題の一つとなっている。この物語の中で、物理的喪失による喪失感もあるが、精神的喪失による喪失感もある。まず、羊博士と黒服秘書の「羊」の喪失による喪失感を説明し、そして、鼠の自殺と「僕」による幕引きが喪失感の本当の意味を明らかにする。彼らはみな自分にとって大切なものを喪失したが、その喪失感に対する扱いはかなり違う。

2.1 「羊」の喪失—羊博士と黒服の秘書

二人とも「羊」を喪失した。羊博士にとって、羊の喪失は人生価値の喪失である。黒服の秘書にとって、「羊」がないと、人は「精神の王国」を作り上げることができない。彼らは羊を精神の支えとしているので、羊に対する喪失感を受け取ることもできない。つまり、彼らは、羊の喪失という物理的喪失より、人生の支えの喪失という精神的喪失による喪失感に囚われている。その結果、羊博士は半分の人生を葬り去り、黒服の秘書は自

分の命すら失ってしまう。その裏には恐ろしいほどの喪失感が潜んでいる。

2.2 鼠の自殺に反映された喪失感

もし、羊の喪失と十二滝町の喪失が消極的な喪失とすれば、鼠の自殺に現れる喪失は魂の再生を求め、いわゆる積極的な喪失と考えられる。「羊」は、右翼の大物の体を離れた後、鼠に入り込み、右翼の大物の亡き後の強大な権力機構、「あらゆる対立が一体化する」「アナーキーな観念の王国」を「鼠」に引き継がせようとする。しかし、「鼠」は自分の「弱さ」への執着によって、それを拒否する。そして、「羊」の「意志」を呑み込んだまま、「羊」に支配されることなく縊死する。

鼠の心の奥に腐っていく「弱さ」が隠しているのである。その「弱さ」のせいで、鼠は自閉の中で苦しんでいたのである。然し、その「弱さ」は、鼠にとっての唯一のものである。自分の「弱さ」を自己の心の闇として抱え込んでいた鼠に対して、自己を苦しめさせる「弱さ」は自分が存在している証明である。つまり、その苦しさで自分が生きていることを感じるのである。鼠は自閉からの解放ということを求める。そのため、「死」を選択することは生きるからである、肉体ではなく魂に求められたのである。ここに現れる喪失感は物理的喪失、つまり、死別によって生まれた。然し、鼠は命を喪失することを通して、自閉から解放でき、魂も再生できることになる。

2.3 「僕」の幕引きに反映された喪失感

喪失から再生を得るのは鼠以外に「僕」もいる。鼠と違って、魂の再生ではなく、新しい人生を始め、すなわち、自分の再生を得ることになる。「僕」は本作の主人公であり、妻との離婚という喪失から始まって、美しい耳のガールフレンドの出会いがあったが、結局ガールフレンドや鼠も失って、新たな喪失に向かう人物である。作品の最後に、「僕」は別荘につくと、女友達の姿が消え、羊のぬいぐるみを着た「羊男」、つまり「鼠」

と再会して、「僕」の使命を果たせた。しかし、結局「鼠」が亡くなった。「僕」は最終的に鼠による「羊殺し」を見届けることで、いろいろなことを失ったという実感を持つのであるが、その「いろんなものを失いました」という言葉の意味が過ぎ去った「青春」とするならば、羊博士の「君はまだ生き始めたばかり」という言葉は、正しく「僕」が過去の幻影からこの時解放されたことを証明するものである。それは、また、「僕」の「再生」を示唆するものである。「僕」は「鼠」がもうこの世界にいないことを考える時、二時間泣いたのである。つまり、埋め立たれた海岸にわずか残った砂浜というのは「僕」と鼠にとって記念すべきな場所であると同時に、治療地としての「僕」の再生の場所でもある。「僕」は泣くことで、「喪失感」を受け取り、新しい人生に向かっていくことになる。

3. 『羊をめぐる冒険』における喪失感の精神性

「僕」は、冒頭で妻を喪失した。妻の喪失がなければガールフレンドと出会うこともなく、羊を探したかどうかとも分からない。そこで、最初の「喪失」が意味を持っている。また、羊を探すことになるのも、右翼の大物が羊を「喪失」したからである。右翼の大物の「羊付き」は羊博士の羊の「喪失」とは切り離せない。そして、右翼の大物の「喪失」と「僕」の「喪失」が繋がり、羊をめぐる冒険に出ることになる。そのため、「僕」が鼠の「喪失」を知るようになる。また、鼠の「喪失」は「羊」の徹底「喪失」と秘書の命の「喪失」に導いた。つまり、「喪失」が、様々な事象に繋がりを与えているのである。それは直面する事実であり、回避することはできない。それは、現代社会に喪失を受けつつある人々の共感を得るのであろう。

また、作品中、喪失に対して、羊博士は喪失感に囚われ、残りの人生を「羊探し」に費やした。彼は肉体的に生きているが、自分としてすでに死んでしまう。それに対して、「僕」と鼠は生と死という違った選択をすることになったが、「喪失」を受け取ることで、喪失感の束縛から抜け出し、

最後、二人とも再生を得る。つまり、「喪失感」を受け取ることで、「再生」と「突破口」を探すことが不可欠である。この小説が魅力あるものであるのは、「喪失感」は気力を溶解させず、実は精神的充実をもたらすからなのである。即ち、物質の豊富な現代社会に生きている人々は、虚無感や喪失感といったものに対する不安な気持ちを、小説の中の登場人物に重ねて共感し、「喪失は絶望すべきものではなく、人として生きていく上の必然である」ということがわかるようになる。それこそ、小説の喪失感の精神性である。

おわりに

拙論は、『羊をめぐる冒険』における喪失感を物理的喪失による喪失感と精神的喪失による喪失感に分けて、羊博士と黒服の秘書の羊の喪失、鼠の自殺、「僕」の幕引きと羊博士が「僕はいろんなものを失いました」に對した答えをそれぞれ分析した。まず、羊博士と黒服の秘書は羊という物理的喪失によって人生の価値などといった精神的な喪失に至った。それから、鼠の命の「喪失」という物理的喪失によって、「僕」も鼠も自分なりの「再生」を得た。最後は、作品中の喪失から得られる啓発に基づいて、喪失感の精神性を解明した。『羊をめぐる冒険』に見られる喪失感を探究し、「喪失は絶望すべきものではなく、人として生きていく上の必然である。」という結論を出した。

参考文献

- 1) 村上春樹『羊をめぐる冒険』講談社、1982年。
- 2) 黒古一夫『村上春樹「喪失」の物語から「転換」の物語へ』勉誠出版、2007年。
- 3) 浅利文子『村上春樹物語の力』翰林書房、2013年。
- 4) 柴田元幸、沼野充義、藤井省三、四方田犬彦、国際交流基金【企画】『世界は村上春樹をどう読むか』文藝春秋、2009年。

- 5) 羽鳥健司、石村郁夫「筆記と語りに関するポジティブ心理学的研究の概観」『東京成徳大学臨床心理学研究』第16号、2016年、205-212頁。
- 6) 荻原桂子「村上春樹『羊をめぐる冒険』論——〈残余の自己〉との出会い」『九州女子大学紀要人文・社会科学編』第3号、2008年、143-154頁。
- 7) 江口真規『日本近現代文学における羊の表象：漱石から春樹まで』彩流社、2018年。
- 8) 和田雅秀「村上春樹における対象喪失の文学」『早稲田文学』第147号、1998年、60-73頁。
- 9) 山本力「対象喪失の様態とその位置付け」『岡山県立短期大学紀要』第34号、1991年、1-8頁。
- 10) 柿崎隆宏「作家としての冒険：村上春樹『羊をめぐる冒険』論」『九大日文』第20号、2012年、51-71頁。
- 11) 遠藤俊介「終わりを知らぬ物語—村上春樹の小説世界を題材にしての包括的喪失論—」西南学院大学、2002年。
- 12) 小島基洋「午前8時25分、妻のスリッパ、最後に残された五十メートルの砂浜：村上春樹『羊をめぐる冒険』における〈再・喪失〉の詩学」『人間・環境学』第24号、2015年、1-12頁。

東野圭吾の作品の死亡描写の研究 ——『白夜行』を例に

恵州学院外国語学院日本語学科 2020 年度卒業生 鄭 清蘭

■指導教員 翟 文穎、康 伝金

講評

東野圭吾は日本の有名な推理小説家であり、『白夜行』という小説では死亡が主に肉体死亡と精神死亡の2つの方面に現れていることが発見された。その中で、肉体死亡は他殺と自殺の2つの方式がある：悲劇的な小さい人物が殺されて不合理な社会現実を訴え、精神死亡は現在の社会の生存苦境と精神破壊と密接に関係している。『白夜行』中の死亡の描写は社会現実、社会

矛盾と密接に関連している。なお、筆者は卒業後ハルビン師範大学日本語研究科への進学が決まっている。

はじめに

『白夜行』は日本の有名な推理作家の東野圭吾に発表された長篇推理小説である。この作品は1973年の夏、大阪のある廃ビルで起きた質屋殺し。何人もの容疑者が捜査線上に浮かぶが、決定的な証拠がないまま時は流れていく。当時小学5年生だった被害者の息子・桐原亮司と、ある容疑者の娘・西本雪穂は、何かを抱えながらもその後の人生をそれぞれに歩んでいくかに見えた。しかし、二人の周囲では一見関連性のない不可解な事件が次々と起きるのであった。心を失ったゆえの彼らの19年間を、様々な登場人物たちの視点を通して叙事詩的規模で描いている。小説は、絶望しながら守り抜く寂しげな愛情と、執拗で緻密な冷静な推理を見事に結びつけている。

1. 死亡の描写について

人類と同時起源の死亡は、古い美学問題や哲学問題として、人類に探究されてきた。陸揚は『死亡の美学』の中で、死亡の美学の角度から出発して、中国と西洋の異なる文化の文脈における生死観念及び死亡と宗教、悲劇、魂の美的関係を検討し、そして死亡の現代意識に対して分析を行った。また顔翔林は『死亡の美学』の中で、美学を中心とし、同時に哲学、神話学などを運用して生存と破滅と芸術の美学の探究を行い、同時に、文化史、芸術史の豊富な資料を結合して、一連の審美発見の意義に富んだ見解を提出した。

死亡の描写とは、「死亡の事件」をテーマとして描写する。1990年代に形成されて、それ以降、多くのテーマの描写が学界で発掘と検討されて、「死亡の描写」という名詞も現れてきた。

2. 『白夜行』の中に現れた死亡

本稿で「死亡の描写」とは、東野圭吾作品である『白夜行』中の「死亡の事件」という事実を持つテーマの創作であり、真実の肉体の死亡であろうと精神死亡であろうと、著者は死亡事件について記述している。この小説では死亡が主に肉体死亡と精神死亡の2つの方面に現れていることが発見された。その中で、肉体死亡は他殺と自殺の2つの方式がある：悲劇的な小さい人物の殺されて不合理な社会現実を訴え、精神死亡は現在の社会の生存苦境と精神破壊と密接に関係している。『白夜行』中の死亡の描写は社会現実、社会矛盾と密接に関連している。

2.1 肉体死亡

肉体死亡は物理学的な意味での死亡であり、『白夜行』における探求の重点はこの死亡の誘因と行為を引き起こすことである。一般的には、推理小説という独特の文学的なタイプは、殺人事件に関連しており、殺人事件が発生し、死亡が降臨し、肉体が死亡することはいうまでもない。そのため、肉体死亡は自殺と他殺に分けられている。

他殺は『白夜行』の中で東野圭吾が人物を殺害したという記述は多くなく、詳細な環境の雰囲気描写や殺人を演出することが主な手段として読者の好奇心を刺激し、読者を惹きつける推理小説とは大きく異なっている。古今東西、一般的な推理小説は、推理物語の発展の鍵となるストーリーの個体死亡を詳細に説明し、事件の進行に役立つ。しかし東野圭吾は、殺された者に対しては常に一蹴していて、決して墨を流さない。『白夜行』の冒頭のように、西本雪穂一家の状況や桐原亮司が図書館によく行く場面が簡単に描かれて、その後、桐原亮司のお父さんの死体が廃ビルの中で発見され、全巻の物語の引き金となった。しかし、このような重要な事件についても、東野圭吾はいくつかの言葉で持っただけで、警察は被害者の身元を確認し、何もできないことを調べて次の場面に移った。このように少し感傷的な数筆で描かれた死亡は『白夜行』という本にあふれていて、

あるいは直接の説明もせず、他人の口で誰かの死亡を表現していた。『白夜行』では、東野圭吾が描いた小さな人物の死亡は、生前のように無名で淡々としており、死亡は見えない形で人々の命を奪っているようだった。明らかなのは、『白夜行』という作品に大量の他殺事例があるにもかかわらず、殺害されたこと自体に読者にあまり注目してほしくなかったことだ。前述のように『白夜行』は当時のバブル時期に作られた作品であり、当時の人々は金銭や名誉的地位をひたすら追求して、愛情、友情などの貴重な感情を無視して社会全体を堕落させたものであり、『白夜行』の死亡の描写が形成された背景には、現在の生命の窮状や危機の下にあることが挙げられている。他の推理小説家が消費犯罪に関心を持つ好奇心や恐怖とは異なり、東野圭吾の『白夜行』では死亡の描写とは対照的な次元が存在し、殺人現象の背後にある深い原因を重視している。『白夜行』で悲劇的な人物が殺される形で命を絶ったのは、往々にして彼らの何らかの過ちではなく、理不尽な社会的現実によるものだった。

顔翔林（2008：194）は彼の『死亡の美学』の中で自殺を「人間の精神と社会には素が作用する二つの文化現象が存在し、社会の原因もあれば個人の心理的な原因もある」と定義している。そのため、自殺は作者に自己価値の表現を植え付けることに有利であると考えられている。『白夜行』の中で、自殺も非常に注目すべき側面でもある。桐原亮司は自分の父親を殺した後、西本雪穂を守るために、次々と他人を殺した。そして最後に西本穂子が警察の捜査から逃れるために自殺した。桐原亮司にとって、自分の破滅には歯が立たないし、雪穂が傷つけられない限り、彼の命には意味があった。顔翔林は『死亡の美学』で自殺を二つの状況下の自殺に分類している。第一には「臆病な自殺」は、自殺者が恐怖を抱いて、選択できない生存環境に追い詰められた絶望的な行為である。主体は主に実生活の中で権力、金銭、享楽、美色、などの功名の利禄を求めて、また追いかけている過程で挫折して、最終的にこのような逃避の方式で自己解脱を求める。このような行為は消極的な色を帯びているため、一般に世間から賞賛されない。第二は「勇敢な自殺」である。『白夜行』で東野圭吾が桐原亮

司の自殺行為について死亡したことは間違いない。

2.2 精神死亡

『白夜行』の死亡の描写は現在の時代の苦境、社会の現実を反映したものであり、つまり人文的配慮として表現されている。桐原亮司は、自宅の質屋で育っていくうちに、母親と店員が浮気をしてしまう。ある時、桐原亮司が母親と店員のセックスを目撃した、幼い彼にとっては大きなショックだったに違いない。そのため、桐原亮司は西本雪穂が女性を強姦させ生活上の障害を一掃する必要があった時、ためらうことなく再び道德の一線に触れた。桐原亮司の精神滅亡の道に向けて、母の浮気、殺人、強姦を目撃したことから始まるというなら、西本雪穂の精神滅亡は比較的秘密である。桐原亮司が自分の父を殺したことから、彼はずっと暗い中で生活していくことを運命付けられた。西本雪穂はこの闇の中の人を利用して、自分の出世を遂げたい夢を達成した。西本雪穂は陽光の中を歩いていますが、彼女の心はすでに暗い深淵に沈んでいる。小説の中で、西本雪穂は「自分の生活には太陽はないが、太陽の代わりになるものがある」と語っている。亮司は雪穂の生活のためにあらゆる障害を一掃し、雪穂の再生を見た後、自分の命を絶つことを選んだ。太陽の代替者が消えた後、西本雪穂は暗闇の中で独走し始めた。だから桐原亮司の死亡は、桐原亮司が太陽の中で歩いている夢の完全な破滅と自己精神の破滅を象徴しているだけでなく、西本雪穂の精神的破滅をも象徴している。

東野圭吾は日本の社会派推理小説家松本張清の影響を受けて、事件推理を通じて、犯罪の社会原因を追究する。これらの推理小説作品は現実性と真実性を重視し、強い時代性を持っている。また、『白夜行』では事件の分析だけでなく、人物の性格も重視し、例えば西本雪穂は、自分の目的を達成するために、桐原亮司を利用して、私利私欲のイメージが浮き彫りになる。桐原亮司は西本雪穂を深く愛しており、幼い頃の父親の西本雪穂に対する行為を補うために、彼女のために献身的に奉仕し、専一であり、思い切って愛のために犠牲になるというイメージを作っている。そして、日

本の文壇独特の死亡観を持つ作者といえる東野圭吾は『白夜行』で犯罪を起こす社会根源を見出し、社会環境の影響と犯罪心理の形成を研究する。

3. 死亡と人間性の関係

小説の背景には、日本のバブル時期において、「バブル経済」という言葉が何度も登場している。小説が始まった当時の事件地は廃れた腐ったビルで、当時の日本経済の衰退と不況を暗示するようだ。社会学者の統計によると、この時期の日本の人口の1/3近くは失業者で、家庭は巨額の債務を背負っており、経済はピークからどん底に落ち、お金を無駄に使っている日本人はお金の重要性を実感し始めている。生きるため、「安全感」のために、お金は愛情、友情など人間の間の最も貴重な感情を凌駕するものになり、人間性はお金を追いかけて見失い、自己主義、社会の無罪感などが盛んに行われている。『白夜行』では、推理と人間性の間には二重の真実があり、真実の中には更に善悪の基準がない。

『白夜行』の中で、第一の真実は幼い頃の自衛的な意外犯罪を隠すために、20年間嘘をでっち上げたり、罪のない人を殺したりしてきた男女が主人公だ。第二の真実はバブル経済の生存圧力の下での人間性の歪みと魂の支援の愛にあり、悲劇が絶えず起こる原因は日本社会の道德問題に対する思考であり、このような不幸な人生は男女主人公の子供のころから始まった。最後に事件を絶えず発生させた根源は男女主人公ではなく、社会道德と人間性の歪みであり、作者は不思議な犯人である子供を出発させ、問題を鋭い社会道德に向け、人間性の良識を問うことで、深く考えさせられる。

おわりに

本稿では、東野圭吾作品における死亡の描写の形成原因を検討する—死亡の描写を述べること—死亡と人間性の関係や作者の目的という考え方

に従った。日本の文壇独特の死亡観を持つ作者といえる東野圭吾は、日本の先輩作家の伝統を受け継ぎながら、現在の社会の現状に合わせ、自身の体験や見解に溶け込み、絶望の中で希望を絶やさず、死亡の中で生命を展望している。

参考文献

- 1) 東野圭吾『白夜行』集英社、2002年。
- 2) 東野圭吾『容疑者 X の献身』文藝春秋、2005年。
- 3) 和田勉「東野圭吾論」『九州産業大学国際文化学部紀要』第55号、2013年、1-2頁。
- 4) 姚建美「白夜行における桐原亮司の人間性への考察」『新日本文化研究会会誌』第1号、2014年、51-58頁。
- 5) 洋泉社編集部『東野圭吾全小説ガイドブック』洋泉社、2013年。
- 6) 海德格尔『存在与时间』三联书店、1987年。
- 7) 顔翔林『死亡美学』上海人民出版社、2008年。
- 8) 牛麗、「从「白夜行」看東野圭吾偵探推理小説中的人性」『語文学刊（外語教育教學）』第7号、2010年、48-49頁。
- 9) 李昕、「推理小説為何能燃燒中國書市——東野圭吾系列暢銷探因」『新觀察』第6号、2010年。
- 10) 成瑞「松本清張的“社会派”推理小説研究」『考試週刊』第2号、2011年。
- 11) 楊俊洪「東野圭吾偵探小説中的魅力解讀」『名作欣賞』第33号、2011年。
- 12) 曹艷春、李世新「中日偵探小説發展路徑比較」『井岡山大學學報』第6号、2011年。
- 13) 張永「東野圭吾作品影視改編研究」河北大學、2011年。
- 14) 鍾翔「論東野圭吾作品中的死亡書寫」湘潭大學、2012年。
- 15) 秦思思「東野圭吾推理小説特色解析」湖南大學、2012年。
- 16) 張景一「東野圭吾作品的社會性——以《白夜行》為中心」『作家雜誌』第6号、2013年。

日本語教育に中国の伝統文化を取り入れる策略の探究

惠州学院外国語学院日本語学科2020年度卒業生 李 小翠

■指導教員 庄 婕淳、康 伝金

講評

現代の日本語教育は中国の伝統文化と緊密に関連しており、日本語教育の中で中国の伝統文化の有効な導入が不足であれば、理想的な教育効果を得ることは困難である。本論文は調査研究法と文献研究法を利用し、言語知識、言語運用能力と文化間コミュニケーション能力を強調するとともに、中国の伝統文化の日本語教育分野への導入戦略について研究する。現在、一部の日本語教育の分野では確かに中国の伝統文化の存在が無視されるというような深刻の問題があり、それによって日本語教育の仕事の質に危害を及ぼしている。単純な言語知識と能力の教育モードだけでは教育内容が有効に応用されていることが保証しにくい。そのため、日本語教育政策を調整し、日本語教師が主導的な役割を果たし、日本語実践授業を構築することによって、中国の伝統文化を日本語教育の分野に有効に導入することにより、日本語教育の全体の質を向上させることに直接的な促進意義があると思われる。なお、筆者は卒業後広州大学学科教育研究科への進学が決まっている。

はじめに

現在、我が国の日本語教材の多くは中国の伝統文化を取り入れることに欠けている問題がある。日本語教育は文化を導入するという基礎的な理解を備えているが、仕事の重点を日本文化の導入に置き、中国の伝統文化の導入は一つの基礎的なものとして認識されていない。そこで、日本語教育に中国の伝統文化を具体的に取り入れる策略を探究することは、日本語教育の質を向上させる鍵となると考えている。

本稿は国内の日本語教育において、中国の伝統文化が無視されているという問題について、政策、教師養成、教学模式などの面から、日本語教育の過程で中国の伝統文化を日本語教育分野における導入戦略について探究をする。王召弟（2017：114）は彼の『日本語教育における中国伝統文化導入研究』の中で、「文化的要因は言語教育に直接的な積極的な影響を及ぼしており、日本語教育の仕事は中国の伝統文化の効果的な導入がないと、教育の質を大幅に低下させる」と述べた。王召弟は日本語教育における中国の伝統文化の意義と現状を分析し、価値観、言語行為、非言語行為と社会文化背景などの四つの面からまとめて、日本語教育に中国の伝統文化を導入する戦略をまとめた。研究の焦点を中国の伝統文化が日本語教育の意味におくことに大きな啓発を受けた。上記の研究から見ると、研究者たちが様々な角度で「日本語教育」における文化教育の重要性を論じたが、日本語教育に中国の伝統文化を取り入れる策略の探究はそれほど多くない。

そこで、本稿では、日本語教育に中国の伝統文化を取り入れる策略について探究したいと考えている。また、この研究によって、日本語教育において中国の伝統文化を取り入れる重要性を強調したいと考えている。

1. 日本語教育の現状について

日本国際交流基金が2018年に発表した「2018年度海外日本語教育機関調査」の結果によると、2018年度の海外日本語教育は全世界142の国と地域をカバーしており、日本語学習者の総人数は384万6,773人に達し、前回の調査（2015年度）より19万1,749人（5.2%増）増加した。中国では2018年度に日本語を学ぶ総人数は100万人を突破した。

1.1 中国での日本語教育の現状について

中国では、日系企業と対日交流の増加に伴い、多くの専門学校はすべて日本語専門課程を開設し、大量の日本語人材を育成し、社会の日に日に増

加する需要を満たしており、特にここ 10 年来、中国の日本語受験教育は大きな進歩を遂げた。「しかし同時に多くの不足も露呈し、日本語教育では読み書き能力に偏重し、聞くレベルの訓練を無視していることが多いだけでなく、文化の導入がまだ足りない」(李明姬, 2017: 162)。

1.2 中国の伝統文化導入の現状

現在、我が国は日本語教育の中で中国の伝統文化の導入は主に価値観と社会文化背景を通じて導入している。一部の日本語課程は中国の伝統文化の導入を行っていないため、これらの課程は学生に日中両国の文化の相違を感じる機会を提供することができなく、学生に良好な言語学習環境を提供することができない。

2. 日本語教育における中国の伝統文化を取り入れる重要性

現在、国内の日本語教育は日本文化の導入に限られており、中国の伝統文化の内容は非常に少なく、本土の文化に対する理解と日本文化に対する尊重と共有は形成されていない。文化教育を設置する基礎の上で、この国家民族の伝統文化教育の内容を増加することは学生の文化素養を高めることに役立ち、異文化意識と異文化交際能力を育成し、それによって現在の社会の国際型人材に対する需要を満たすことに役立つ。

2.1 中国の伝統文化に対する理解を深める

現在、世界文化の多様性と同時に、多文化が混在している現実のなか、学生は主体文化価値の正確な判断ができなく、伝統文化精神に対して疑問を生じ、国民の文化認識は危機化している。そのため、日本語教育の中で中国の伝統文化を取り入れ、学生の民族的誇りを育成し高めることに有利であり、学生の文化帰属感を強め、その構築と確立にはっきりとした正確な文化認識を確立させ、個人、民族、ひいては全体の国家に対して、意義は重大である。

2.2 文化の誤読を減らし、相互理解を深める

迫田久美子（2002：89）によれば、日本語教育において、日本文化への入力のみを強調し、本民族文化の教育を無視すると、学生は 2 つの文化の違いや共通認識を意識せず、2 つの文化を柔軟に融合させることができない場合、文化の誤読を招くことになる。中国の伝統文化を学習し深く理解し、文化の交際能力を高め、そして日本語を交流ツールとして使用することは、文化の誤読の問題を減らすことができ、中国の伝統文化を有効に伝播と発揚することができると思われる。

3. 日本語教育に中国の伝統文化を取り入れる策略

歴史上、中国文化は日本文化に大きな影響を与えており、現在まで続いており、両国文化には深い共通文化要素があることが知られている。そのため、移転理論に基づいて、中国の伝統文化を掌握することは日本語の学習と日本文化の理解に積極的な影響を与えることができる。

3.1 日本語教育の政策を企画する

まず、国家、政府、教育部門の政策制定のレベルから日本語教育における中国の伝統文化の導入を重視すべきである。中国の「普通高校日本語課程標準（2017 版）」はすでに文化の導入を高校日本語の重要な構成部分の一つとし、その中に「日本とその他の国家の文化を理解し、初歩的な思弁能力と多元文化意識を形成して自主学習能力を高める」以外に、「学生の全面的な発展を促進し、現在の多種の文明、多種の潮流の交流と交戦の中で、国内外を融合し、中国の優秀な伝統文化を伝播と発揚することを通じ、異なる文明の間にコミュニケーションの架け橋を架けることができる」（中华人民共和国教育部，2018：1）。

3.2 日本語教師の実践能力を高める

日本語教師の教える能力について議論をする際に、「資質」という用語が多用される。横溝・河野（2006：8）は、「教師・研究者の主張に基づくアプローチ」に基づき、日本語教師に求められる資質を明らかにし、その資質の評価方法について論考するものである。日本語教師の資質は、「人間性」「専門性」「自己教育力」の3本の柱で構成される。「人間性」と「専門性」を教師自身の努力で高めていくことは可能でありそのエネルギーとなるのが「自己教育力」である。「自己教育力」は、「教師の向上しようという『心構え』のようなもの」または「教師としての向上心」のようなものである。「そのため、日本語教師は自発的かつ積極的に自身の文化素養を高める必要があり、言語の功底を深め、文化間の交流意識を高め、中国の優秀な伝統文化を伝播することを自分の碩任とする」（張微，2018：8）。

3.3 日本語教育における中国の伝統文化を取り入れる方法

それでは、具体的にどのような方法があるのか。「積極的に多元化実践教育模式を採用し、学生に対する正確な誘導を強化し、学生は文化間の興味の育成を重視する」（寧雅南，2016：47）と指摘しているように、教育モードを改善することで、日本語の聞き、話す、書く、読む、翻訳などの言語活動は生活中で実際の有機的な結合に達することができる。

3.3.1 比較法

「比較法とは、日本語教育において、日本語表現と作文習慣の理解と学習だけでなく、日本語と中国文化の有機的な結合にも注目し、日中両国の言語的、文化的な違いを発見し、日本語表現の意味を正しく理解することである」（天野郁夫，1997：36）。比較法で日本語の授業を行うと、学生の日本語学習に対する興味が大いに高まる。教師は実例比較を用いて教えることができ、その中でも画像、映像動画、音楽などは非常に理想的な素材である。

3.3.2 情景法

情景法とは、教師が教学内容、教学目标に基づいて、学習状況を結び付け、様々な手段を利用して学生に接近し、生活に密着した環境を創出し、学生に動態的な過程の中で観察または問題の解答を通じて知識を発見し、知識を理解し、応用する知識を得させることだ。「情景教育法を採用することで、学生が学んだ日本語の知識を中国の伝統文化を取り入れせることができ、言語運用能力を効果的に鍛えることができる」(新渡戸稲造, 2001: 125)。

3.3.3 直観法

直観法とは、教育の中で実践または具体的な事物、現象および事物、現象のリアルな描写によって学生の感性認識を引き起こし、生き生きとした表現を獲得させ、知識に対して比較的全面的で深い理解と把握をさせることである。「教師として、中国の伝統文化に対して発掘と説明を行う以外に、学生が中国の伝統文化に接触する過程で十分な誘導と助けを与え、言語と文化を有機的に結合させる」(佐藤学, 2006: 25)。伝統的な日本語教育のモードを突破するために、学生の興味を刺激することによって、授業参加度を高める。

おわりに

どの民族も自分だけの文化を持っており、言語は重要な交流ツールとして、文化の積載と伝承にとって非常に重要な役割を果たしている。言語学習の目的は、人と人とのコミュニケーションを実現するためだけではなく、お互いの文化を知るための有効な手段でもある。双方のお互いの文化の理解が不足していると、交流の過程で誤解が生じることは避けられない。

文化要素は言語教育に対して直接に積極的な影響があり、日本語教育における中国の伝統文化を取り入れるのが不足であれば、日本語教育の質も

大きく低下するに違いない。そのため、日本語教育は中国の伝統文化の学習を重視しなければならず、中国の伝統文化を教育過程に溶け込ませてこそ、本当に日本語を学ぶエッセンスを身につけることができ、学習効率を高めることができると考えている。

参考文献

- 1) 新渡戸稲造著、鈴木範久編『新渡戸稲造論集』岩波書店、2001年。
- 2) 佐藤学『教育方法学』岩波書店、2006年。
- 3) 天野郁夫『教育への問いー現代教育学入門』東京大学出版会、1997年。
- 4) 迫田久美子『日本語教育に生かす第二言語習得研究』株式会社アルク、2002年。
- 5) 横溝紳一郎、河野俊之「日本語教師の実践能力の解明に関する一考察ー4つのアプローチ」『日本語教員養成における実践能力の育成と教育実習の理念に関する調査研究』2006年、181-188頁。
- 6) 寧雅南『文化視角の日語教学研究』湖北科学技術出版社、2016年。
- 7) 李明姬『日語教学与思維創新研究』西南交通大学出版社、2017年。
- 8) 王召弟「日語教学中中国伝統文化導入研究」『外語外文課程教育研究』第29号、2017年、114頁。
- 9) 張微「中国传统文化在跨文化交际教学中的必要性与融入途径研究」『黑龍江教育（高教研究与評估）』第4号、2018年、7-8頁。
- 10) 中華人民共和国教育部『普通高中日語課程標準（2017年版）』人民教育出版社、2017年。

「仏男子」と「仏系青年」に関する比較研究

惠州学院外国語学院日本語学科2020年度卒業生 鄭 温敏

■指導教員 付 自文、康 伝金

講評

2014 年、「仏男子」という言葉が日本雑誌に登場し、後に「仏系××」から派生した「仏系青年」が中国で盛んになった。本稿では、物質面、行動面、精神面から仏男子と仏系青年の特徴とその形成原因を比較しながら研究した。結論は以下のとおりである。仏男子は物質面で、低欲望の特徴を持っている。行動面では、孤独を楽しむ。精神面では、興味を第一に考えている。仏系青年は物質面で、無私無欲の特徴を示し、行動面では、競争がなく、自分の利益を保全する。精神面では、情緒を第一に考えている。物質面でも行動面でも精神面でも、仏系青年は仏男子より受動的で消極的である。なお、筆者は卒業後上海大学新闻与传媒学研究所への進学が決まっている。

はじめに

2014 年、ファッション誌『nonno』3月号では、バレンタイン応援企画として『イマドキ仏男子を攻略せよ』と僧職男子特集が組まれている。そのなかに、「仏男子」は趣味を第一に、恋愛が面倒で、一人でいることが好きだと指摘した。2017 年 12 月、中国では「第一批 90 后已经开始出家了」というブログが「仏系恋愛」、「仏系乗客」、「仏系ショッピング」や「仏系フィットネス」など、多くの「仏系現象」をが要約摘出されし、苛酷ではなく、いいかげんで、あまり気にかけない生き方を尊び、挑戦や苦境に直面したときに争えない中国の青年像が露呈されている。本稿では、両国の社会的な背景から「仏男子」と「仏系青年」の心理と行為を組み合わせ、両者の内包と特徴を比較しようと思う。「仏男子」と「仏系青年」

に関する比較研究を通して、両国の青年をより明確に認識することができ、我が中国の青年の発展をよりよく指導することにも役立つだろうと思う。

1. 「仏男子」の内包

仏男子は物質的な面では低欲望を示し、行動面では孤独を楽しんで、精神面では興味を第一に置く。

1.1 物質面：低欲望

まず、「仏男子」は物欲が低く、金銭を積極的に追求しない。1980年代から90年代の間、日本の経済は「平成不況」に陥って、「失われた20年」と歴史的に言われている。今の30歳以下の若者の両親は、自分の物欲を満足させるために、欲望と出世欲を持っていて、力を入れて働くことしかしなかった。ある程度、彼らは子供の目の中の「経済動物」になったとはいえる。表面的に豊かな生活をしているが、住宅ローンに押しつぶされて息ができない。いまの若い人たちは、感傷的な少年期を過ごしたと言える。

このように、仏男子は父の世代の生活を繰り返すことを恐れている。彼らは住宅ローンを引き受けたからず、結婚して子供を産むなどのリスクと責任も持ちたなくなってしまう。また、物質的な豊かさが問題にならなかった時、人々はこの社会で健康に生きていくことができ、強い向上心がなければ、男性にはほとんど欲がない。物欲がまったくないのみならず、出世欲も薄れていく。こうした人たちを、大前研一氏（2015：74 + 81）は、「物欲・出世欲喪失世代」と定義し、それによって当時の日本では「プア充」という流行語が登場したことを指摘している。

1.2 行動面：孤独を楽しむ

仏男子は孤独を楽しむ。チームになって大きな取り組みに参加すること

よりも、どちらかといえば個人プレーを好む傾向がある。女性が相手を求める時に、男性の経済力が結婚後の生活水準を保証するかどうかが重視されている。男性は結婚を準備するために重い経済的圧力を負っている。そのストレスによって、一部の日本人男性が結婚に対する憧れを失い、恋愛を面倒がって、好きな異性に出会っても自分から勝ち取ろうとしない。

また、現代の発達したネット技術は時間と空間の制限を超えて、仏男子に研究や仕事や社交などのための有利な条件を提供した。大前研一(2015: 73)は、「物欲と出世欲が失われた世代」は携帯電話のみでこの世界を連結し、携帯電話で友人と連絡して、各種情報を得て、テレビ番組まで携帯電話で見ていることを指摘している。この点は日本オタク男子とやや似ている。

1.3 精神面：興味が第一

仏男子は、自分自身の考え方や価値観に対して大きな自信を持っており、好きなことに関しては、寝食を忘れて没頭するほどの高い集中力を発揮することができる。

それは日本のオタク文化にも少なからず影響されていると思われる。また、渡邊秀司は「趣味縁」についてはオタク集団を事例として述べている部分が多い。オタク集団の閉鎖性や単なる消費者としてのオタクだけではない、新たな公共性について考えるのであると指摘している(2017: 47-52)。これは人々がオタクに対する認識が積極的になっているということである。注意すべきことは、社会活動の進行は集団から離れることができず、仏男子はひたすら自分自身の価値の実現を追求し、自分のペースで行動し、社会の正常な運行に不利である。

2. 「仏系青年」の内包

中国では、青年は14歳から35歳までの年齢層の人を指すことが多い。仏系青年は高異質性の集団の一つとして、物質面では無私無欲で、行為面

では自分の利益の保全に努力し、精神面では情緒を第一位に置く。

2.1 物質面：無欲

仏系青年は贅沢なブランド品を求めず、平価で使いやすいものをより気に入る。休暇の時も海外旅行をせず、家で寝て昼まで起き、午後はお茶を飲んで日光浴をして、老人と同じような生活をしている。

これは主に中産階級の形成が物質的基礎を提供しているためである。改革開放と社会主義近代化建設に伴い、中国国民の収入レベルは絶えず向上し、中産階級群体の規模も拡大しつつあった。「90 後」を主体とした青年は、国の経済発展が最も急速な時期に生まれ、親のように経済が逼迫し、生活が困難な時代を経験したことがない。そのため、彼らは物質の富は父の世代ほど求め、その損得をあまり気にかけない。また、一部の中産階級の家庭は経済圧力がない。そうした家庭に生まれた若者は、両親の寵愛を受けて、多くの努力を必要とせずに穏やかな生活を送ることができると思い込んでいる。そこで現状に安んじ、親が提供する生活レベルで人生を楽しめる。

2.2 行動面：自分の利益を保全する

行動面では、仏系青年は競争を恐れ、自分の利益の保全のみに努める。仕事でも勉強でも、強い競争意識はない。

これは主に階層格差の固定化による集団不安が仏系青年に心理的基礎を与えているためである。彼らが職場に入って、直面しているのはすでに中産階級社会であり、70 代、80 代よりも、住宅、医療、教育、戸籍などの大きな負担が大きな挑戦をもたらしている。「努力しても、成功する可能性は少ない」は多くの仏系青年の心の声になった。また、現代のアップテンポな生活が急な社会的雰囲気醸し出しており、社会全体の不安感がさらに高まっている。「努力しても成功するとは限らないので、頑張らないほうがまだ」と仏系青年は思っている。美しい理想と厳しい現実の衝突は、一部の青年に無力感を呼び起こした。

2.3 精神面：情緒が第一

仏系青年はトラブルに直面した時、いつも「大丈夫」、「もういい」、「まあいい」と自分ながらに言い、「物を以て喜ばず、己を以て悲しまず」の情緒原則を貫こうとする。

しかしながら、こうした穏やかそうな情緒原則は、人生を見通した後の無欲で淡泊な人生哲学よりも、若者が自らの無力感を他人に見せないための建前に過ぎないと思われる。この点は、すでに卜建華ら（2018：105－111+61）が『『仏系青年』群像の社会心理診断と支持』という文章の中で指摘されているところである。すなわち、仏系は一種の褒め言葉のように見えるが、実際には「喪文化」のために合理化されたコートを羽織っており、実質的な内容は「喪文化」と大きく関連しており、その根底にあるのは社会の現状に直面する青年群体の退廃感そのものである。言い換えると、不機嫌な外見の下で、仏系青年は強い落胆感を持っているということである。そして、自分に平和な気持ちを持たせ、生活中的の出来事が気持ちに与える衝撃を緩和するに過ぎない。

3. 「仏男子」と「仏系青年」の比較

3.1 物質面

物質面では、「仏男子」も「仏系青年」も低欲望を示している。しかし、仏系青年は受動式の低欲望で、仏男子は能動的に低欲望である。

仏男子も仏系青年も基本的な生存を維持する経済力を備えていることである。それに対して、その違いは主に仏男子と仏系青年の成長背景が関係している。バブルの時代に生まれた仏男子は家庭環境と社会環境の影響を深く受けて、淡泊な金銭観を形成した。これは能動的な低欲望である。それに対して、1990年代、中国は改革開放後、経済が次第に発展し、人々に希望を与えた。その時代に育った仏系青年は、豊かな生活に憧れていた。つまり、仏系青年はもともと物欲を持っている。しかし、社会に出たばかりの時に、強い中流階級の力に直面して、豊かさを求める道で絶えず

ひどい打撃を受けてしまった。

3.2 行動面

行為の方面で、仏男子は社交を遠ざけ、仏系青年は競争を遠ざける。社交と競争は社会の正常な運行に不可欠な一環であり、仏男子と仏系青年は現実から逃避していることがわかる。しかし、仏系青年は心に残る希望を守るから、また一回現実には打ち負かされることを恐れる。それが現実に対する妥協である。それに対して、仏男子が一人であることを求めるのは現実から逃避しながら、もう一つ快適な方法で抵抗する。彼らは相変わらず自分のペースでよく生活して、自分のやりたいことをして、自分を向上させる。

儒家が提唱した忠、孝は現代の青年に強い責任感を負わせてる。仏教文化は平和に人生に直面する価値観を提唱し、青年群体に感情の流出口を見つけさせ、自分の理想を平和な心理状態の下に埋め、社会の競争にもう参与しないで、自分の利益を守る。日本政府はアニメ文化を大いに支援し、特にオタク文化は早くからアニメ文化と密接に溶け合っている。それが仏男子に良い生活環境を作ってくれた。

3.3 精神面

趣味を第一にして、感情を第一にして、両方とも自分の欲求を満足させるためである。しかし、仏男子の欲求は仏系青年より高いである。これは日中両国の社会構造に明らかな違いがあり、青年に異なる社会環境を作ったからである。

ここ 10 年、日本の関係部門はさまざまな分野で財政支援、職業技能や職業意識の育成などを通じて共同で青年の就職を推進してきた。一方、2004 年中国社会科学院の「現代中国社会流動」報告によると、幹部の子女が幹部になる機会は、非幹部の子供の 2.1 倍以上である（鄧志強, 2013: 6）。このような境界がますますはっきりしてくるにつれて、異なる階層は異なる生活様式、行為、価値観を形成し、隔たりを生じて、異

なる集団の間の衝突がエスカレートし、対立から対抗に向かう。一部の中国青年の理性はこの中で絞殺された。彼らはこの社会に対して不満や卑屈さに満ちている。そのため、彼らは承認の欲求が強い。

おわりに

本稿では、文献法を用いて、日本の「仏男子」と中国の「仏系青年」の特徴とその形成原因について研究し、比較し、結論を得た。結論から、物質面では、仏男子は暗い経済バブル時代を経て、「プア充」生活にあがられているため、低い欲望の特徴を持っている；行為面では、基本的な生活は心配がないため、国家がオタク文化を支持するため、彼らは独りを楽しむ；精神面では、物欲を失ったため、彼らは自己を追求し、興味を発掘し、興味を第一にする。しかし、仏系青年は物質面で、中流階級の力の支持あるいは対抗のため、彼らの欲求不満を最後に無欲と表現した；行動面は、彼らは階層格差の固定化の苦難を受けて、争いをせず、自分の利益を保全する；精神面では、マズローの需要レベルの理論によると、彼らは承認の欲求を十分に満足されていないので、情緒を第一に置いた。物質面でも行為面でも精神面でも、仏男子より仏系青年は受動的で消極的な状態にいる。これまで、中国は日本の後塵をたどり、低欲望社会に陥ると考えられてきた。この研究により、仏男子と仏系青年はいずれも低欲求の顕著な特徴を示しているが、両者の内包には明らかな差があり、背後の影響要因は無視できないことが明らかとなった。著者達は依然として中国の基本的な国情から出発し、中国の発展過程中出现した問題を正視し、青年群体の発展を正確に誘導しなければならない。

参考文献

- 1) 大前研一『低欲望社会「大志なき時代」の新・国富論』小学館、2015 年。
- 2) 江裕真『瞄准御宅族——御宅市場研究』商周出版社、2006 年。
- 3) 渡邊秀司「「優しい関係」の展開について—オタクを事例とした人間関係の考察にむけて—」『佛大社会学』第1号、2017 年、47-52 頁。
- 4) 邓志強「青年们的阶层固化：“二代”们的社会流动」『中国青年研究』第6号、2013 年。
- 5) 夏媛、張佳華「日本青年就业问题及其政策对应措施」『当代青年研究』第1号、2017 年、123-128 頁。
- 6) 卜建華、孟麗雯、張宗偉「「佛系青年」群像的社会心态診斷与支持」『中国青年研究』第11号、2018 年、105-111+61 頁。

日本コモンキャリア広告表現についての研究

—— テレビ CM を中心に

惠州学院外国語学院日本語学科 2020 年度卒業生 黎 彦谷

■指導教員 饒 秋玲、康 伝金

講評

現代社会は情報時代である。情報時代の中に社会の様相は色々な広告に見ることができ、広告はますます大きな役割を果たしている。まずはインターネットで日本コモンキャリアのこの 5 年間のテレビ CM を収取し、整理したあとで分析する。大量な関連文献を読んだ上で、実証型、タレント・有名人型、キャラクター型三種類の広告を主要な研究対象にする。言語・タレント・キャラクター三方面の運用を分析し、それぞれの特徴とメリットを得る。そしてそれぞれのデメリットを分析する。実証型 CM は画面と音声で商品の特徴を実証し、視聴者に強い印象を与えるが、時間を控えがたい。タレント・有名人型 CM は有名人を起用し、有名人の影響力和ハロー効果を利用するが、有名人のイメー

ジが商品を超える恐れがある。キャラクター型 CM はオリジナルキャラクターで競合他社と差別化ができ、販促効果があるが、キャラクターと商品とのつながりが弱い。最後には総括し、デメリットを避けるため自らの意見を提出する。なお、筆者は卒業後神戸大学人間発達環境研究科への進学が決まっている。

はじめに

広告とは国の文化を映す鏡であり、また、近い未来を覗き見できる窓でもある。日本の広告制作は世界中でも有名である。筆者の調査によると、前世紀の 70 年代から日本の広告に関する研究が盛んになっている。多くの学者は様々な角度から広告を研究しているが、大部分は新聞広告や雑誌広告などの印刷媒体の広告を中心にしている。1940 年、アメリカで世界の第一台のテレビが作られてから、テレビの普及につれて、CM は商品の主要な宣伝手段のひとつになってきた。

本稿では日本のコモンキャリアの実証型・タレント型・キャラクター型という三種類の CM を中心にする。コモンキャリアの CM を収集し、言語や心理トリックの面から、違うタイプの広告の表現の特徴を解説し、メリット・デメリットを分析し、日本の広告表現の研究分野をすこし広げてみたい。

1. コモンキャリアの CM について

まずは広告・CM について説明する。『明鏡国語辞典』と『大辞泉』により、本論文での広告は有料の媒体を使って商品・サービス・事業などの内容を宣伝すること。CM は民間放送などで、番組の前後や途中に行う広告ということ。

また、CM 総合研究所 2015 年-2019 年の『CM 好感度ランキング』によりコモンキャリアの CM が日本で人気のある事実が得られる。

1.1 テレビCMのタイプ

ADviceにより、CMは9つの種類に分けることができる。それぞれは実証型・イメージ型・タレント型・ドキュメンタリー型・ユーモア型・キャラクター型・CMソング型・比較広告型・ブランディング型。

この情報で全てのテレビCMが単一のタイプだと思いがちだが、筆者の調査によると、大部分のCMは単一のタイプではなく、多数のタイプを組み合わせたものである。

例えば、2015年2月ドコモがつくった「3秒クッキング」シリーズのCM。このシリーズのCMにはタレントの片岡明日香が出演され、誇張した表現方法で3秒以内に料理を作っている。料理の完成の速さで4G通信データの速度を表現した。

CM「3秒クッキング」はタレントを起用し、ユーモアな表現方法を使った。すなわち、タレント型・ユーモア型の二種類で作られたCMである。

1.2 コモンキャリアのCMについて

貝薈（2013：17-18）によれば、コモンキャリアの広告は二種類に分けられる。その一つは、サービス、料金プラン、通信データを数字で説明するものである。もう一つは、文学作品のように、商品の効用を説明するより、イメージの方をアピールし、消費者のこころを動かして、感動と共鳴を求めるものである。貝薈の分類方法とAdviceの分類方法をあわせて考えると、コモンキャリアのサービス、料金プラン、通信データが最も似合うCMタイプは実証型CMである。

しかし、筆者が収集したCMの中に、最も多いのはタレント型のCMである。コモンキャリアの商品・サービスは普通の商品と違い、短い時間のCMではなかなか商品の特徴を表現できない。だから、コストを抑えるため、コモンキャリアの実証型CMは比較的に少ない。その代わりに、タレント、有名人、キャラクターを利用し、CMを作る場合が多い。

したがって、コモンキャリアの実証型、タレント型、キャラクター型三

種類の広告に絞り、コモンキャリアのテレビ CM の広告表現を研究する。

2. コモンキャリアの CM における広告表現

伝統的な広告は主に言葉で商品を宣伝しているのとは違い、CM は画面・音声・言葉・動きなどの多種の要素で作られたものである。

2.1 コモンキャリアの CM の言語について

広告の文字の部分は文案・文章であり、一般的にはコピーと呼ばれる。そして広告の文案で強い印象を消費者の心に残させる短い文句はキャッチフレーズと呼ばれる。テレビコマーシャルは印刷媒体と同じ、キャッチフレーズは最も重要な表現方法である。消費者が CM を見るときに、画面でコピーを見るだけではなく、音声でもコピーを聞ける。

広告コピーを作る時、広告宣伝語の AIDMA という法則に基づき、商品の属性や特徴などを表現すべきである。AIDMA（アイドマ）はアメリカの作者、サミュエル・ローランド・ホールが 1920 年代に提出した広告宣伝に対する消費者の心理のプロセスを示した略語である。まずは視聴者の注意を引く。そして消費者に商品を訴求し関心をひく。その後、消費者の欲求に満足をもたらすことを納得させる。最後は、視聴者に行動を起こさせること。つまり、どうやって視聴者を消費者にするかという過程である。

しかし、CM の中で言語表現ができる部分は限られている。視聴者の注意を引くために、出演者の声が上がったり、手を振ったりする。つまり、非言語的な要素も重要な役割を果たしている。

2.1.1 実証型 CM の言語

実証型 CM は、商品とサービスの特徴を映像や音声で実証する CM のタイプである。このタイプの CM は商品情報の本質的な問題に正面から取り組むアプローチなので、選んだ言葉は消費者の購入に直接に結んでい

る。映像や音声も商品の特徴を実証するので、短い文句でも強い印象を残させる。

2.1.1 有名人・タレント型CMの言語について

筆者の収集したCMにより、大部分のコマーシャルが有名人とタレントを起用している。有名人とタレントは自らの影響力を持っているから、それらの影響力を加え、キャッチフレーズはより良い効果を得られる。

CM「しばられるな WE DO」は六人のタレントを起用し、タレントは演出でCMのキャッチフレーズ「しばられるな」に合わせている。このCMのキャッチフレーズも短く、サービスの利点を強調し、タレントの自分の魅力と出演で宣伝効果が上がる。

2.1.3 キャラクター型CMの言語について

キャラクター型CMは、商品や企業名を消費者に覚えてもらうためには、企業はオリジナルキャラクターを作り、そして本社のCMでキャラクターを登場させ、商品の想起を狙っているCMである。

Y! mobileの「マッサージ篇」で斎藤工はニャンシー社長にマッサージをしながら「モミモミ」を言っている。タレントが「コミコミ」を何回重複し、同語反復方というレトリックを使った。魏来（2013：40）は広告のキャッチフレーズは同語反復の修辞技法を通じて、印象的な文句になり、宣伝効果がいいとあらわした。また、「コミコミ」と英語の「Coming Coming」の発音が似ている。これは言葉遊びの一種で、同音異義語を利用して視聴者の注意を引こうとしている。一つは「スマホの本体代が込む」の「コミ」、もう一つは、「うちのプランを選んでください」の「Coming」。このようなユーモアで、覚えやすい言葉は良い宣伝になる。

2.2 有名人・タレント型CMによる宣伝

今西鉄之助（1998：139）は、「わが国のCMは、その約七割が有名人広告であると言われている。外国のCMにも俳優やタレントが登場する

ものはもちろんあるが、日本ほど多くないようである。」と述べた。

有名人・タレント型 CM とは、タレントあるいは有名人の起用により、消費者の注目を引き、そのイメージのインパクトの強さに便乗し、商品とサービスをアピールする CM である。野澤智行（2000：99）が主張するように CM およびブランドへの好意をもたせるため、人気キャラクターの CM 起用が有効なことが明らかである。

2.3 キャラクター型CMのキャラクターの関係と運用

キャラクター型 CM はタレントを起用する場合もあるが、タレント型 CM と違い、キャラクターはスキャンダルなどがないので、キャラクターのイメージは比較的に安定に保つことができる。そして、キャラクターの起用により、他社との差別化ができ、キャンペーンやイベントなどにキャラクターの活用で販促効果の推進力となる。これは心理学の「カクテルパーティ効果」である。キャラクター型 CM もこの効果を利用し、消費者の目を奪い、消費させる。

3. 違う CM タイプのデメリット

本論文の2でコモンキャリアの実証型、有名人・タレント型、キャラクター型、3つのCMタイプについて研究し、別々のメリットを言及した。第三章でそれぞれのデメリットについて研究してみる。

3.1 実証型CMのデメリット

実証型 CM の特徴は単刀直入で商品の特徴をそのまま説明する。しかし、コモンキャリアが販売しているのは通常な商品ではなく、消費者に対するサービスである。CM で当社のサービスを実証するのは容易なことではない。当社のサービスを証明するために、時間がかかる。『広告白書』（2010）の番組により、日本のコマーシャルのおおよそ八割が15秒のCM。2.1の例のCMの長さは六分も過ぎて、消費者のコモンキャリアの

サービスへの認識の負担を上げるかもしれない。しかし、完全なCMを通さないと、企業の優秀さが伝わらない。周知のように、CMにおいて時間はまさにお金、CMが短い時間枠に収まらないと企業に対してコストが上がるようになってしまう。したがって、CMを作るときにその長さを把握しなければいけない。

3.2 有名人・タレント型CMのデメリット

タレントは人々に知られ、知名度が高いので、タレント型CMは素人が出演したCMに比べ、そのインパクトがより高い。しかし、有名人・タレントのイメージが商材や会社名よりも先行してしまう状況もあり、デメリットになりうる。

CMに対して、出演している有名人・タレントにスキャンダルが出てしまうと、そのタレントが出演したCMの会社への消費者のイメージも悪化する恐れがある。したがって、消費者は商品自体になにかの不満があるなしに関わらず消費意欲が下がったりする。

3.3 キャラクター型CMのデメリット

もちろん、CMに出たキャラクターは面白ければ、消費者に印象を残せる。しかし、CMはテレビのドラマやバラエティ番組と違い、ただ面白いだけではいけない。例えば、ドコモのCMに出たマスコットのポインコ兄弟。ドコモCMは中国で放送していないが、このキャラクターが中国で人気になった。外見が可愛く、消費者の目を引くことができるが、ドコモのサービスの特徴があまり伝わっていない。サービスについて魅力のある広告内容を伝えられないなら、その広告は失敗だと言ってもいいだろう。

おわりに

日本の広告は、日本の独特な特徴とスタイルを持っている。広告制作の

各方面から見ると、日本の広告は世界の最前線にある広告大国と称しても良いだろう。本論文では、コモンキャリアのCM広告から実証型、有名人・タレント型、キャラクター型の三種類の広告を選び分析した。

広告の目的は商品及び企業を宣伝することはもちろんだが、商品の販売あるいはある種の観念を伝えるためである。要するに、広告を制作するときに、どのようなことを視聴者に伝えたいかを考えなければならない。消費者のライフサイクルが広告視聴に影響を及ぼすので、ライフサイクルに合わせた広告の内容を考慮する必要がある。

参考文献

- 1) 野澤智行「タレント・キャラクターがテレビCM認知および評価に及ぼす影響」『広告科学』第40号、2000年、93-99頁。
- 2) 貝蕾「日本通信広告キャッチフレーズの用語表現研究」『相愛大学研究論29』相愛大学、2013年、17-34頁。
- 3) 今西鉄之助『効く広告表現』マネジメント社、1998年。
- 4) 魏来『日本商品広告用語表現的研究』遼寧師範大学、2015年。